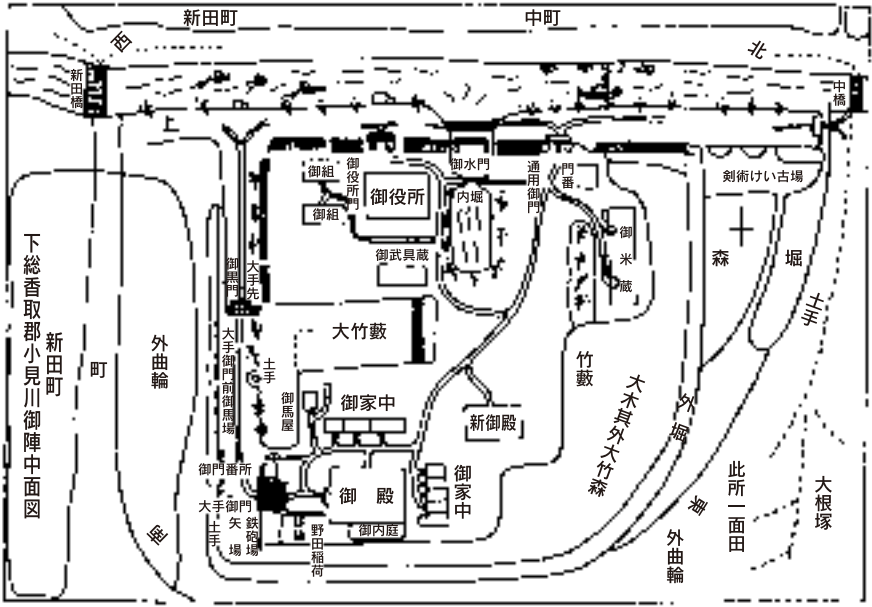


## 「藩主もいろいろ」 小見川藩内田氏



▲小見川陣屋絵図（脇秀雄家文書）

天正18年（1590）8月1日、徳川家康が江戸に入ると小見川の地は粟飯原氏から代官吉田佐太郎の支配に変わり、太閤検地が実施されます。

その後、三河武士の松平家忠が埼玉県忍城から転封され、その子忠利、さらに土井利勝、安藤重信等が支配し、これ以降佐倉領、幕府領を経て内田正信の領地となります。

3代將軍家光の奥小姓であった正信は、寛永16年（1639）相模国海老名の1800石に旧小見川村周辺の8200石を加増されて一萬石の大名に列せられます。

慶安2年（1649）には下野国都賀郡・阿蘇郡内

の五千石がさらに加増されて、鹿沼に居所を定めます。

この頃、正信は3代將軍家光のもとで將軍近習出頭人を兼ねるまでになります

が、慶安4年（1651）4月、將軍家光が47歳の若さで病死するという一大事が起きます。側近であった大老堀田正盛、老中阿部重次、内田正信ら5人は即日切腹し、殉死しています。

このことは当時もかなり話題になり、恩顧を受けながら殉死しなかった人たちは大いに非難されたようです。

### 小見川藩の成立

この殉死を受けて、7歳の正衆が後を継ぎ2代目と

なります。この正衆の治世に小見川の御陣屋の普請や多くの用水堰が築かれます。

正衆の孫に当たる正偏が3代目となりますが、享保9年（1724）に乱心して

室（妻）に傷害し、幽閉されています。そのため、長男である正親は家督の一部を没収され、4代目となります。そして居住地を鹿沼から小見川に移し、名実ともに小見川藩が成立します。

その後、5代正美―6代正良―7代正純―8代正肥と続きますが、正肥は嫡子がないまま亡くなったので旗本の石河貞通の三男正容が養子となつて9代となります。

この正容は、当時としてはかなり型破りな藩主

で、町芸者を落籍して屋敷に引き込み、深川や向嶋へ船で出かけては女郎と手を取つて歩き、身体には種々さまざまの刺青をしたことなどが咎められ、天保8年（1837）に隠居を仰せ付けられています。

その後3人の子どもが相次いで家督を継ぎますが、いずれも父正容より早くに亡くなっています。そのため、元治元年（1864）、

分家にあたる内田正路の次男、正学が13代目となります。慶応4年（1868）から、房総の地も戊辰の騒乱に巻き込まれましたが、正学の気転により、小見川藩は事なきを得ています。

明治2年（1869）6月、正学は版籍を奉還して藩知

事に任命されています。



▲内田正学

内田氏は3代正偏や9代正容のような藩主が居たにもかかわらず、無事に廢藩置県を迎えることが出来たのは、初代正信が將軍家光の死に臨み、殉死して果たした功績によるところが大きかったのではないのでしょうか。

小見川の本願寺には、内田氏歴代の位牌が残され、重臣であった脇家には「小見川御陣中図面」が伝えられ、いずれも香取市の指定文化財になっています。